

## 長沢鼎の手紙の下書きとそこに込められた思いと精神

森 孝 晴

アメリカの小説家ジャック・ロンドン (1876-1916) は薩摩藩出身の2人の武人に出会っている。その一人がまさに幕末の薩摩藩士長沢鼎 (1852-1934) である。長沢は幕末の薩摩藩英国留学生15人の最年少のメンバーとして、4人の随員とともに1965年に鎖国の禁を犯して英国に渡った。ロンドンに着いた長沢は、一人他のメンバーと離れて北部アバディーンのグラバー邸に送られ、ここで中学生として2年を過ごすことになるが、1867年には、トマス・レイク・ハリスの勧めに従い親しい兄貴分森有礼ら5人とともにさらにアメリカに渡った。

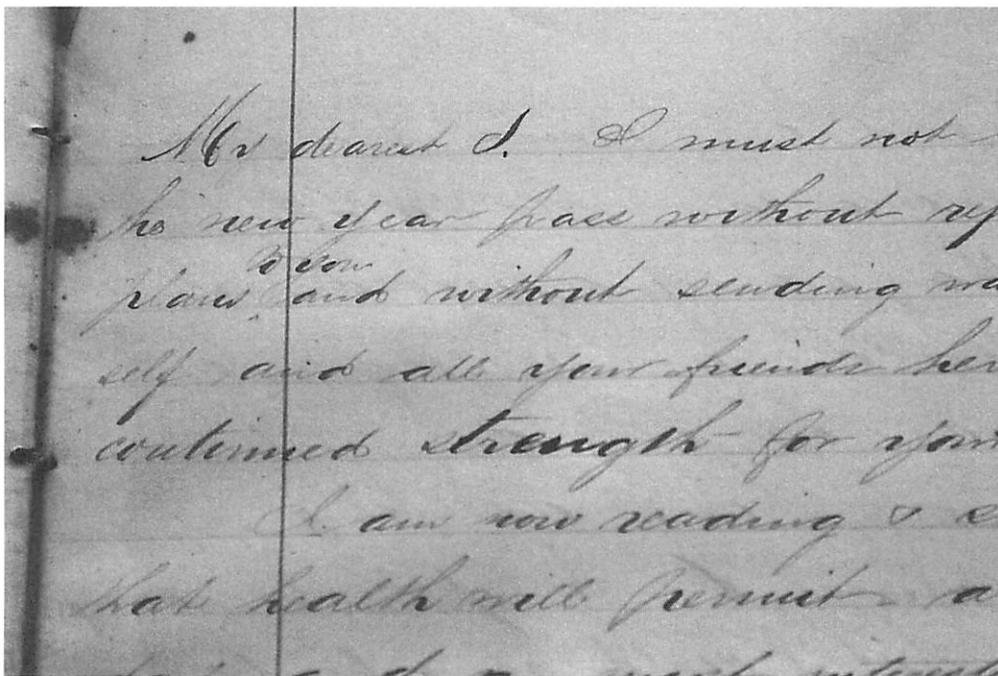
長沢は、ニューヨーク州のアミアに約2ヵ月間いた後ニューヨーク州のプロクトンに移り、1867年12月末から1875年の2月中旬までここで過ごした。ニューヨークにきた時彼はまだ15歳の少年で、プロクトンには25歳まで滞在した。他の留学生が帰国するなか長沢は、1875年にハリスと共にカリフォルニア州サンタローザに移住し、ハリスを手伝ってワイナリー創設を進め、その後その経営権や所有権を握ることとなり、やがてワイナリー経営者として成功して「カリフォルニアのブドウ王」と呼ばれるまでになった。彼は1934年に82歳でサンタローザに亡くなっているが、ついに永住のために母国に帰ることはなかった。

ところで、2011年12月に鹿児島県いちき串木野市の職員が渡米し、サンタローザにおいて長沢の一次資料を大量に入手し持ち帰った。その中に存在は知られていたが長くその所在が不明だった長沢の日記の原本が含まれていた。これは筆者にとって驚きであった。実は、1980年にこの日記の全文を翻刻・発行し、その全文の邦訳も1994年から98年にかけて発行していた故門田明鹿児島県立短期大学名誉教授も、この日記の原本は見たことがなかったのだ。日本における日記の翻刻・発行は現地の研究家ゲイ・ルバロン氏の翻刻を元になされたのである<sup>1</sup>。

この日記は長沢がプロクトン滞在中の19歳の時に1871年1月1日から4月23日まで書きつづられたものであるが、今回持ち帰られた日記を見てみるとまず第一に長沢の書く文字の美しさに驚く。また、さらさらと書かれた筆跡を見ると、いかに彼の英語が流暢かも容易に知れるのである。しかし、この原本には門田明が翻刻しなかった部分があった。それは日記本文の最後の日 (1871年4月23日) の日記の後に書かれた彼の手紙の下書きであった。

<sup>1</sup> とても貴重な資料の翻刻を後続の研究者に残してくださった故門田明県立短期大学名誉教授に感謝の意を表したい。長沢の日記の翻刻は、『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』の第9号 (1980年)、第23号 (1994年)、第26号 (1997年)、そして第27号 (1998年) に掲載されている。なお、これらの「研究年報」は鹿児島国際大学に所蔵されている。

詳しくは後述するが、門田はこの下書きについてすでに著書の中で触れている。したがってこの下書きが付属していること自体は新しい発見ではない。美しい割には読み取りにくい長沢の英語だが、まずはここに下書き原文の一部を写真で紹介する<sup>2</sup>。



(いちき串木野市保管)

長沢の慣れた筆跡が感じられるし、活字に慣れている我々には芸術性さえ感じさせるのではないだろうか？ ただ、なかなか読みにくい字もあり解説には時間を要する部分もあるのは事実だ。

そこで、筆者は、いちき串木野市から長沢の手紙の下書きを原本からのデジタル原稿の形で提供してもらい、2012年2月中旬から鹿児島国際大学国際文化学部のデイビッド・マクマレイ教授と共同でその翻刻の作業を行った<sup>3</sup>。作業は2月25日に終了したが、ここに翻刻の原稿の全文を掲載する<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> このたびこの貴重な写真を提供していただき、写真と翻刻の掲載も快諾いただいた鹿児島県いちき串木野市のご厚意に対し、この場を借りて深く感謝したい。同市の計画している薩摩藩英国留学生の記念館設立の成功を祈るものである。

<sup>3</sup> 鹿児島国際大学国際文化学部の同僚であるデイビッド・マクマレイ教授には、忙しい中全面的な協力をいただいた。ここに記し、心よりお礼申し上げます。

<sup>4</sup> マクマレイ教授と筆者の努力にもかかわらず、一部にどうしても正確には判明しなかった文字がある。ここにお断りするとともに、後続の研究者のご訂正をお願いするものである。

My dearest S. I must not let this first month of the new year pass without reporting myself and my plan to you and without sending warmest greetings from myself and all your friends here with wishes for your continued strength for your true service.

I am now reading and studying all the time that health will permit -- about seven hours a day and am most interested in reading works of Mr. Harris selection giving the history of the conquests of the so called Christian races over the less dominant peoples of the globe and studying the effect produced upon the conquered races by a religion of force and ceremonies without an unwilling spirit of brotherly love and charity.

Of course I always have the pain of feeling that our government is not satisfied that I am not devoting myself more entirely to book learning and the acquirements of some especial branches of science, but there are plenty of others who are doing that. We are an inquisitive people and quick to learn but, what we need most it seems to me to be a deeper knowledge of the underlying structure of Human Society. The intelligent observer must see that the present social and religious systems of the Christian world are passing through great changes and Japan would gain little by adopting blindly the knowledge that are being proved by deeper weight to have served their purpose and are being cast aside as a worn out garment. Therefore I conscientiously feel that I am being better prepared for future usefulness by the special training that I am receiving here that I could possibly be anywhere else and this I believe you concur so and I only go over the ground in case any solicitous friends in the Embassy are interested in knowing my present feelings.

If you should feel like bringing to Salem or Eve any of the gentlemen who you think would be

glad to hear from Mr. Harris' life his views of the present condition of European and American social and political affairs he would be very glad to talk with me.

これは、1871年の4月頃(19歳)に長沢が、薩摩藩英国留学生の同志でのちの初代文部大臣である森有礼(1847-89)——1868年6月にすでに帰国済み——に宛てて書いたものだ。最初のMy dearest SのSというのは沢井鉄馬(変名)、すなわち森有礼のことである。

では、この手紙の内容を見てみよう。最初のパラグラフでは、自分は今年の正月に森に自分のことや自分の計画について報告すべきだったし、彼の幸せを祈って温かい挨拶を送るべきであったと反省している。第2パラグラフでは近況報告をしており、すなわち、自分は今一日に7時間、健康の許す限り読書をしている、そしていま最も関心を持っていることが2つであると述べている。その2つとは、一つは、師であるトマス・レイク・ハリスの著作を読むことであって、その内容は、いわゆる「キリスト教人種」が地球において劣勢な人民を征服した歴史についてである。また二つ目は、力と儀式の宗教によって征服された民族にもたらされた結果について研究することである。

第3パラグラフがもっとも長く重要な段落である。この段落の中で長沢はまず、自分が書物を読んで学んだり、何か特別な分野の科学を習得したりすることに完全には専心していないではないか、しかし一方でそれをしている人は他にもたくさんいるのではないかと明治新政府が自分に不満を持っているだろうと感じて、いつも心を痛めていると言う。さらに彼は、日本人は知識欲のある国民で覚えも早いと、我々日本人が必要としているのは人間社会の基礎をなす構造についてのより深い知識だと思ふ、と語る。

続いて長沢は、知性的な観察者というものは現在のキリスト教社会の社会的・宗教的なシステムが大きな変化を経験しつつあることを理解すべきであり、日本は、もはや用済みになっている知識や着古した服のように脱ぎ捨てられた知識を盲目的に身につけてみても得られるものはほとんどない、と説く。そして、したがって、と彼は続け、今受けている特別な訓練によって将来より役にたてる人材になる準備を自分は続けているところで、それにより自分はどこへでも行けるようになるだろう、と述べた後、森が自分に同意してくれると信じている、誰か友達が自分の今の心境に関心を持ってくれるなら自分はただこの地を越えていくだけである、と語ってこのパラグラフを締めくくっている。

最後の第4パラグラフは森への呼びかけで、もし森が、ハリスから現在の欧米の社会的・政治的状况について聞きたいと言う人を連れてくる気があるなら、自分とハリスは喜んで話し合ってみるつもりだ、と言って筆を置いている。ただし、結語が見当たらないので、実際の手紙はもっと長かった可能性がありそうだ。上でも記したように、門田明は著書『カリフォルニアの士魂』の中でこの手紙に触れていて、第3パラグラフの自分が怠惰に見えているのではと

長沢が心を痛めている部分と日本がキリスト教社会から得るものはないと言っている部分を紹介している。そしてそれを受けて、次のように述べている。

二十才にも満たぬ年令で、長沢はこういう成熟した考えを身につけていた。この引用の原文は、長沢自身英語で書いたものであるが、彼がいかに聡明であり、卓抜した学習能力を持っていたか、これを読むだけでも明らかである<sup>5</sup>。

確かにこの手紙にあらわれる長沢は、孤独な外国暮らしの中でも成熟した考えを持つまでに成長した聡明な青年である。

筆者もこの手紙を分析してみよう。まず第1、第2パラグラフにおいては、長沢の森への思いとハリスへの思いが吐露されるとともに、自分が精力的に勉強していることを訴えている。自分はさぼっているわけではないことを強調し、次のパラグラフの傷心の告白につなげている。ハリスの著作を読んでいるという部分に彼への敬慕が表われ、それは最後のパラグラフに見える尊敬心につながっていく。

門田も紹介しているように、そして筆者もすでに指摘したように、第3パラグラフは最も重要である。長沢の日本と日本人に寄せる熱い思いが見出せるし、言いかえるとそれは長沢の武士道である。彼は、日本人は知識欲があり覚えも早い優れた国民だとの確信を持っているが、しかし今の（明治初めの）日本は欧米の変化に気付かずに欧米の古い知識や価値観にとらわれているといつか置いていかれてしまう、と危機感を表明し助言して、日本がそうならないために、すなわち自分が日本を救うために、有為な人材になろうと日夜訓練に励んでいるのだと自己を肯定する。これはまさに、武士道の象徴のような薩摩藩に生まれ育って藩主の命で世界に飛び出したサムライの責任感なのではないだろうか。

第3パラグラフの締めくくりは、友が自分に関心を持ってくれば私はこの地を飛び出す、というようなことを言っている。原文の英語ではI only go over the ground...である。この言葉をどう解釈するかは難しいところだが、そしてこの時期はちょうど長沢がアメリカ永住を宣言する時期に重なるのだが、一生懸命訓練している自負もあって請われれば自分はプロクトンから世界へ飛び出す用意があるという意味ではないだろうか。それは日本に帰国してお国のために役に立つ可能性もあるという含みもありはしないか。それははともかくとして、長沢は4年後の1875年には満を持してハリスと共にカリフォルニアという新天地・開拓地に飛び出すことになる。この時彼は薩摩藩士として世界に打って出るような興奮を感じたのではないだろうか。

第4パラグラフは、日記本文にあふれているハリスへの思慕と尊敬に満ちている。ハリスの

<sup>5</sup> 門田明・テリー・ジョーンズ共著、『カリフォルニアの士魂——薩摩留學生長沢鼎小伝』（本邦書籍、1983年）、99-100頁。

話は非常に有益だから森や周囲の人がぜひ聞くべきであるから、連れてきなさい、自分が間に入ってやる、と言っているように思われる。この頃の長沢はハリスへの敬意においてはいささかの迷いもなく、彼の思想に触れることが多くの人の成長につながる、日本人や日本が彼の思想を知ることによって薩摩藩出身者が実権を握る新政府の正しい発展にもつながる、と信じていたのではないだろうか。筆者はすでにほかで彼の武士道に触れたが<sup>6</sup>、日本に住む日本人以上に日本を思い、自分が武士であることを決して忘れない長沢鼎の武士道精神がここにはある。

全体を見てきて思うのはそのことである。若き長沢の心は複雑であったろうし、仲間がみな帰国して揺れていたであろう。日本や鹿児島への郷愁はとても強かったはずだ。しかしそれを表に出す、つまりあからさまに顔に出し言葉にするのは武士ではないのだ。手紙にはそこはかたなく彼の郷愁は現れているように思われ、自信と強がりがかみ合っているようにも思われる。短い手紙だが、親友の森に宛てたものでもあり、長沢の本音が見え隠れしているとみてよいだろう。

#### 参考文献

門田明「若き薩摩の群像——サツマ・スチューデントの生涯」高城書房、2012年

---

<sup>6</sup> 森孝晴著「長沢鼎の武士道精神について」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』9（鹿児島国際大学、2012年3月）を参照のこと。